



JCII Bldg. 303, 25 Ichiban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082, Japan
TEL. 03-3265-7451 FAX. 03-3265-7460 E-mail info@jps.gr.jp

公益社団法人日本写真家協会

2015年第11回

「名取洋之助写真賞」

発表会

平成27年9月16日

2015年第11回「名取洋之助写真賞」受賞

受賞者：鳥飼 祥恵（32歳）

受賞作品：「amputee boy—けんちゃん—」
（カラー30点）

2015年第11回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞

受賞者：増田 貴大（35歳）

受賞作品：「終わりの気配」
（カラー30点）

授賞式・平成27年12月9日（水）午後5時
アルカディア市ヶ谷「富士の間」

受賞作品展・富士フィルムフォトサロン
東京・平成28年1月29日（金）～2月4日（木）
大阪・平成28年2月19日（金）～25日（木）

公益社団法人 **日本写真家協会**

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCIIビル303 TEL.03-3265-7451 FAX.03-3265-7460 E-mail info@jps.gr.jp

2015年第11回「名取洋之助写真賞」決まる

公益社団法人日本写真家協会が新進写真家の発掘と活動を奨励するために、主としてドキュメンタリー分野で活躍している35歳までの写真家を対象とした2015年第11回「名取洋之助写真賞」の選考審査会を、8月31日(月)JCII会議室で、飯沢耕太郎(写真評論家)、広河隆一(フォトジャーナリスト)、田沼武能(写真家)の3氏によって行いました。

応募者はプロ写真家から大学在学中の学生までの16名16作品。男性13人女性3人。カラー10作品、モノクロ3作品、混合3作品でした。

選考は1組30枚の組写真のため審査会場の制約もあり受け順に8作品ずつ2回に分けて行い、第一次審査で7作品を選び、最終協議の結果、下記に決定しました。

○一次審査通過者

増田 貴大	「終わりの気配」	志村 賢一	「Export works」
児玉 和也	「風の吹く場所」	鳥飼 祥恵	「amputee boy-けんちゃん-」
片岡 和志	「命の記憶」	松岡 正明	「物質の記憶とゆらぎ」
高橋 健太郎	「HIROSHIMA2015」		

○最終審査通過者

鳥飼 祥恵	「amputee boy-けんちゃん-」
増田 貴大	「終わりの気配」

2015年第11回「名取洋之助写真賞」受賞



鳥飼 祥恵 (とりかい さちえ)

1982年 富山県出身。32歳。2010年 都内の写真学校を卒業。

2012年 フリーランスとして活動開始。2014年 JCII 主催水谷塾 修了。東京都在住。

受賞作品 「amputee boy-けんちゃん-」(カラー30枚)

作品について 上肢、下肢の切断障害を持った選手がプレーするアンプティサッカーの撮影で出会った少年賢ちゃんに魅了された作者は、身体障害者の子どもにレンズを向けることに迷いを抱きつつ、保護者に連絡をとる。撮影の快諾を受け、賢ちゃんの所属するチームに足を運ぶ。そこでまわりの大人たちの賢ちゃんを気遣うおせっかいで明るい姿を見た。昔の日本には当たり

前のようにあった懐かしい人間関係をとらえた作品。

受賞者のことば 「賢は強運の持ち主なんです。けんちゃんのお母様に初めてお会いした時、こんな言葉をもらいました。事故で片足を失った子が強運だと明言され、正直戸惑いました。しかし、今はその意味が明確に理解できます。きっと今回の受賞も彼の強運にあやかっただと思います。けんちゃんはもちろん、ご家族、そして、アウボラーダ川崎の皆さんにこの賞を捧げます。「けんちゃん」が「けん君」そして「石井賢」となる日が今から楽しみです。

2015年第11回「名取洋之助写真賞奨励賞」受賞



増田 貴大 (ますだ たかひろ)

1980年 大阪府生まれ。35歳。2000年(20歳)より写真を始める。

2003年 宝塚造形芸術大学(現:宝塚大学)美術学科 洋画コース卒業。

2004年 グループ展 第2回「モノクロ倶楽部」(千スペース/大阪)。

2005年 MIO 写真奨励賞審査員特別賞受賞(選考:平木収先生)。大阪府在住。

受賞作品 「終わりの気配」(カラー30枚)

作品について 山陽新幹線(新大阪~広島)の車内から、沿線に暮らす人々を撮影した作品。カメラによって切り取った人々の一瞬から「死の臭い」を感じた作者。肉眼では捉え

る事の出来なかった死の気配を、写真という技術によって可視化の域に近づける可能性に気づき、作者は写真術を得た意義を強く感じたという。

受賞者のことば 本当に嬉しいです。今迄針の筵に包まれて写真を撮っていました。身内からはイイ歳して何やってんだと溜息はつかれるし、世間からは「この人、毎日電車の窓に張りついてる」と白い目でみられるし、全身がチクチク痛かったです。でも今回賞に選んで頂いたお陰で、ようやく針の筵から解放されました。自分のしている事に引け目を感じなくなりました。これからは気持ち良く撮影ができます。それが何よりも嬉しいです。

〈2015 年第 11 回「名取洋之助写真賞」総 評〉



選考風景 (平成 27 年 8 月 31 日 JCI 会議室 撮影・小城崇史)

田沼 武能 (写真家・公益社団法人日本写真家協会前会長)

今年の名取洋之助写真賞に応募された中で一番輝いていたのは鳥飼祥恵さんの「amputee boy ーけんちゃんー」であった。けんちゃんは交通事故で左足を失った。そのハンディにもめげず明るく懸命に生きるけなげな姿が捉えられている。作者はスポーツ写真の教室に通い学んだという。サッカースポーツに専念する彼のクラッチ（杖）を使い全身で躍動する光景を捉えているが、それ以上に彼の心理を、人間けんちゃんの生きる姿に心が惹かれる。母親や妹たちとの絆、アンプティサッカー協会のインストラクターの熱心な指導にも感動を呼ぶ、心温まるヒューマンなフォトストーリーである。画面の展開も女性的な繊細さがありながら、力強さも盛り込まれており、名取洋之助写真賞にふさわしい作品である。

奨励賞、増田貴大さんの「終わりの気配」は、新幹線の車窓から見える社会、漠然と見る沿線にもこれだけの人間ドラマが繰り広げられている。そんな発見を感じる作品である。しかし、作者はそこに「終わりの気配」「死の臭い」を感じるというが、いささかコメントには難があるように思う。

日本写真家協会は若いフォトジャーナリストの育成を願い名取洋之助写真賞を創設した。時代を記録し伝え、残すためには大切な役を担う写真のジャンルである。若い写真家の登場を切に望みます。

飯沢 耕太郎 (写真評論家)

初めて賞の選考に参加させていただいて、ドキュメンタリー写真の現在のあり方について、いろいろ考えさせられた。東日本大震災を経て、新たな方法論の模索が始まっているが、まだ地に足がついたものにはなっていない。その過渡期の状況が、今回の応募作品にもよくあらわれていて、迷いや踏み込みの甘さが目立つものが多かったのは残念だった。

その中で、審査員全員が高く評価したのが、名取洋之助写真賞を受賞した鳥飼祥恵さんの「amputee boyーけんちゃんー」である。障害のあるサッカー少年を丹念に取材した作品だが、しっかりとコミュニケーションをとりつつ彼や周囲の人たちにカメラを向けていることがよくわかる。人間関係が希薄になりつつある今、一人の男の子の成長をポジティブな眼差しで見守っている「ちょっとおせっかいな大人たち」の姿が、いきいきと浮かび上がってくる。

別な意味で面白かったのが、名取洋之助写真賞奨励賞を受賞した増田貴大さんの「終わりの気配」である。山陽新幹線の車窓から沿線の光景を写しとめたものだが、ロバート・F・ケネディの「葬送列車」を見送る人々を撮影したポール・フスコの名作「RFK funeral train」(1968)を思い出した。たしかに、生と死とが交錯する現代日本の断面図が見えてくる。

今回の応募作品の審査は、私にとってかなり苦しい作業だった。半分見終わった時に、私が賞に推したい作品は見当たらなかった。だから鳥飼祥恵さんの作品「amputee boy-けんちゃん-」を見た時、私は安堵した。交通事故で片足を切断した男の子がサッカーに打ち込む姿と、周りの人々が彼を支える様子が見事に写し込まれていた。名取洋之助賞に値する作品、これから応援し続けていきたい作家がとうとう見つかったと思った。「応募してくれてありがとう」というのが正直な気持ちだった。

日本写真家協会の会員は、あらゆるジャンルの写真分野にかかわる。写真の多様性と可能性は大きな魅力だ。増田貴大さんの「終わりの気配」のテクニックには舌を巻くし、表現力は非常に優れている。しかし名取洋之助賞というからには、フォトジャーナリズムの特集部門が対象ということになると私は考えている。これが名取洋之助賞でなく、芸術を含むすべての部門の写真を対象とした日本写真家協会賞のようなものなら文句なしで入選かもしれない。

日本はカメラ大国であるのに、フォトジャーナリストの層が非常に薄い。日本写真家協会には、若きフォトジャーナリストを育てる根本的な取り組みを期待したい。

「名取洋之助写真賞」について

公益社団法人日本写真家協会 (JPS) は、社会に貢献する事業として「JPS 展」や「日本写真家協会賞」の表彰並びに顕彰を行っています。2005年に「名取洋之助写真賞」を創設しました。

名取氏は、1950年の協会設立初期から写真企画展への助言。更に、写真著作権の重要性を進言されるなど、さまざまな面で協力を戴いています。没後、名取洋之助に関わった日本工房、サンニュース、岩波写真文庫の創設に関してわが国のフォトジャーナリズムの発展に大きく貢献されたことを顕彰し、主として若いフォトジャーナリストの育成に役立つことを望み、この写真賞を創設しました。

第1回「名取洋之助写真賞」(平成17年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 清水哲朗「路上少年」(カラー)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 伊原美代子「海女」(モノクロ)

第2回「名取洋之助写真賞」(平成18年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 江原一禎「失われゆく記憶」(モノクロ)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 王 晟陽「遠と近-上海の下町」(モノクロ)

第3回「名取洋之助写真賞」(平成19年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 今村拓馬「Kids-existence-」(カラー)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 山本剛士「被災者の心〜新潟中越地震〜」(モノクロ)

第4回「名取洋之助写真賞」(平成20年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 柳瀬元樹「ユーゴの残影」(モノクロ)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 中井菜央「こどものじかん」(モノクロ)

第5回「名取洋之助写真賞」(平成21年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 久塚真央「ゆびさきの星 つまさきの星 こころのなかの星」(モノクロ)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 三澤史明「幸福論」(カラー)

第6回「名取洋之助写真賞」(平成22年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 トム宮川「コールドトン「オーガニック アメリカンズ」(カラー)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 中塩正樹「奈良の祭り人 極上の刻」(カラー)

第7回「名取洋之助写真賞」(平成23年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 林 典子「硫酸に焼かれた人生〜ナイラとセイダの物語」(カラー)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 山野雄樹「工場の少女達」(カラー)

第8回「名取洋之助写真賞」(平成24年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 安田菜津紀「HIVと共に生まれるーウガンダのエイズ孤児たちー」(カラー)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 山本剛士「福島原発事故〜『酪農家の記憶』〜飯館村長泥封鎖」(モノクロ)

第9回「名取洋之助写真賞」(平成25年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 山本剛士「黙殺黙止〜福島の消えた歳月〜」(モノクロ)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 片山育美「とうふ屋のおじちゃん〜a period of time〜」(モノクロ)

第10回「名取洋之助写真賞」(平成26年)

受賞者：「名取洋之助写真賞」 高橋智史「屈せざる女性たち・カンボジアー変革の願い」(カラー)
「名取洋之助写真賞奨励賞」 中塩正樹「誇り高き祭り人 刻を紡ぐ」(カラー)

名取洋之助(1910~62年) ドイツに留学していた名取洋之助は23歳の若さで、1930年代ヨーロッパで勃興していたフォト・ルポルタージュをわが国に導入し、木村伊兵衛らと33年「日本工房」を興す。その後、土門拳、藤本四八、亀倉雄策らと『NIPPON』を創刊し、フォト・ジャーナリズムを確立する。戦後は47年に『週刊サン・ニュース』を創刊。50年に『岩波写真文庫』を創るなど、写真家であると同時にすぐれた企画、編集者でもありました。